ルナソルの羽根

tinkerbell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルナソルの羽根

【Ｎコード】
Ｎ１２７５Ｍ

【作者名】
ｔｉｎｋｅｒｂｅｌｌ

【あらすじ】
―――大帝国ユニヴァ。
ランデル大陸の中で最も美しい国で生まれた第一皇女ルナ。しかし彼女には『尾形千影』というもうひとつの名前と、世界を揺り動かす特別な力を持っていた……。
ルナが１４の誕生日を迎えた時、彼女専属の教育係りが与えられた。３つ年上の美麗で意地悪な教育係りソールとの出会い…ルナの運命が動き始めた瞬間だった。

【Ｐｒｏｌｏｇ】

花々が地面を彩り、溢れる泉は太陽の微笑みを受け輝く。四季に激しい寒暖の差はなく、大地の恵みは人々を豊かにした。

―――大帝国ユニヴァ。

ランデル大陸に住む者全てが焦がれる、神・サングリアが生まれた土地だ。その土地の真ん中にある、一際美しい都ローズライド。

それは新月の夜のこと。
彼の地ローズライドで元気な女児が生まれた。

彼女の名はルナ。

大帝国ユニヴァの第一皇女となる娘であった。

＊＊＊

初めての出産。

大帝国ユニヴァの皇妃・ウェヌスの疲労した身体は達成感に満ちていた。

周りは国の跡継ぎとなる男児を望んだが、ウェヌスには例え生まれてきたのが女児でも全く構わなかった。

きっとあの心優しき夫も、この娘の誕生を喜んでくれる。さあ、可愛い我が子。顔を見せて？

産婆がおくるみに包んだ赤子をウェヌスの顔の方へ近づけた。ウェヌスは重い体を何とか半分だけ起こす。

「皇妃、何とも麗しいお子さまです！」

「…抱いてもいいかしら？」

ウェヌスが聞くと、産婆は目を細めて、そっと赤子をウェヌスの些か頼りない腕に預けた。柔らかな重みがウェヌスにこの上ない喜びを与える。

壊れてしまいそうな小さな手が、何かを掴むかのようにわずかに動くのを見て、ウェヌスは赤子の手のひらにそっと人差し指を添えた。

「あら。」

赤子の指がウェヌスの指を握る。するとウェヌスの脳に一瞬ピリッと電光が走るような感覚がした。

「…もうそんな事が出来るのね。だけどまだ眠っておいでなさい。」

ウェヌスが柔らかく微笑み、その細い指を赤子の額に走らせる。

彼女は確信した。この子は正当な後継者になるだろう。

この国の、そして……

【Round－1】宵姫の憂鬱

「ですからお母様、わたしぜ～～ったい嫌ですからね！」

大帝国ユニヴァ、帝都ローズライド。

都の真ん中にそびえ立つ王城・キルスティン城で、少女の少し低い声が響いた。

――少女の名前はルナ。

１３年前に生まれたこの国の第一皇女である。尊き御名は死ぬまで家族以外に明かさないのが皇族の習わしであり、彼女はその美しい黒髪と月色の瞳から『宵姫』と呼ばれた。

あんなに小さな赤子だったルナは、成長とともに、母である皇妃ウェヌスの美貌を受け継いでいる。ウェヌスは娘の成長を心から喜んだが、些かたくましくなりすぎたようである。

「でもルナ、もうこれまでに18人の殿方を追い返しているのですよ。皇帝をこれ以上困らせないであげて。」

「例えお父様とお母様の頼みでも、わたしは嫌です。婚約しろだなんて！！」

それはルナが13歳の誕生日を迎えた日のことだった。ユニヴァでは一般的に13歳からパーティーの場に出ることを許される。いわゆる社交界デビューだ。ルナの場合一国の皇女。彼女の御披露目は誕生パーティーで盛大に行われた。

闇夜の如き黒髪に映える月色の瞳、オリエンタルな顔立ちは13歳とは思えない妖艶さが感じられた。未成熟な身体がそれを余計に引き立てる。

勿論パーティー会場の客全てがルナに釘付けになった。
初めて見る皇女はまさしく宵の女神だったのだ。

そんなルナを国中の貴族が放っておくわけがない。ルナの伴侶の座は今の皇帝ジュードと皇妃ウェヌスの間に男児が産まれない限り、次代皇帝の地位と直結している。

このランデル大陸最高の権力と、美しい妻を一度に得られるのだ。
これには他国の王族も黙ってはいなかった。

誕生日の御披露目以降、ルナのもとには何十件もの縁談がひっきりなしにやってくる。
政治もまともに出来たもんじゃない。会議の場は貴族の息子の品評会、果ては自慢大会になっていた。見かねた皇帝ジュードがいっそ婚約者を決めてしまえば、とルナに持ち出したのだ。

神秘の印象を人々に与えたルナ。そんな彼女が父の申し出に「うん」と言うことはなかった。

ルナには婚約など以ての外だった。
自分はまだ１３歳だ。『こっちの世界』では１５歳で成人だが、『あっちの世界』では成人は２０歳。

（中学生が婚約なんてバカな話あるか！）

と、内心毒づく彼女は、生まれながらにして自我と名前を持っていた。

『尾形千影』。彼女は２０歳の大学生だった。これがルナになる前の名前だ。

宵姫になる前の最後の記憶は、祖父が遺したという金の腕輪に触れたこと。次の瞬間、彼女は産まれた。大帝国ユニヴァの第一皇女ルナとして。

うまく息が吸えず、目もあかない。パニック状態に陥りながら、ルナは自分に触れた何かが意識を奪っていくのが分かった。

意識が戻ったのはそれから5年も後のことだ。

彼女の小さな身体は大きな天蓋付きのベッドにいた。『尾形千影』の自我が戻れば、色々な推測と共に、変えようのない事実が襲ってくる。

ルナとして育ったこの国も、父も母も、『尾形千影』のにとってはまさにファンタジー。

すぐに自分は異世界に来たのだ、と分かったのだった。

そうして月日が経った。『あっちの世界』には戻れるのか、自分はどうしたいのか。ルナはそんなことに悩む暇もなく王位第一継承者

としての勉強を余儀なくされた。もともと頭の出来が良かったため、ルナはあっと言う間に全てのカリキュラムを終えてしまった。

容姿端麗・頭脳明晰。
ルナには武芸の才能もあり、優秀な世継ぎに父・ジュードは大変喜んだ。
しかしこれだけ完璧な皇女さまも、そのじゃじゃ馬な性格だけは父を悩ませたのだ。

「お父様！わたしどこの誰とも知れない、いけ好かない貴族と婚約するくらいなら、明日にでも教会へ行って、イザベル司教に修道女にしていただきます！！」

【Round－2】母の思惑

ルナの『婚約するくらいならシスターになってやる！』という半ば脅しのような決意に、父である皇帝ジュードは何も言わなく…いや、言えなくなってしまった。

それでも絶えずやってくる縁談を、ルナはバッサバッサと斬っていった。その話はルナに与えられた離宮、グリニッジ宮で働く侍女たちの噂の的でもある。

「聞いた？宵姫様ったら、カーティス皇子に決闘を申し込まれたそうよ！」

「ああ、カーティス皇子って隣国の。宵姫様に随分ご執心なんですってね。」

「そうなのよ。それがあんまりにしつこく姫様のもとを御訪問されるから、とうとう堪忍袋の緒が切れてしまわれたのよ。『わたしは自分より弱い男には興味がありません』って。」

「なるほど、それでカーティス皇子が姫様に決闘を持ち出したのね。」

カーティス皇子は大帝国ユニヴァの隣国・ジェノヴァ国の第二皇子なのだが、例の御披露目以来すっかりルナの虜なのだ。

彼は金髪に緑の瞳を持つなかなかの男前だったが、いわゆるナルシストな性格がルナには耐えられず、先日ぐだぐだと自慢話を続けるカーティス皇子にはっきりと興味がないことを告げたのだ。

「でも大丈夫なの？いくら宵姫様が武芸に通じられているとはいえ、お相手は大の男でしょ？」

「そうよね……あの美しい陶器のようなお肌に傷をつけられるやも、と思うと身震いがするわ。」

しかし女官たちの心配は杞憂となった。ルナの剣の腕は既に軍の責任者であるアンソニーも認めるものだった。

それはもう見事な腕で、家臣たちは皇女の勇ましい姿に帝国の未来が安寧であると確信した。

カーティス皇子の一件以来、皇帝はルナの類い希なる武芸の才を潰してはならぬと感じていた。

仮にルナがこのまま王位を継ぐとすれば、武の力は何よりも支配を楽にする。皇帝自身が弓の名手でもあったため、じゃじゃ馬姫をいっそ更にじゃじゃ馬にしてみよう、と考えたのだ。

「ルナ、お前は法術を知っているか？」

ルナはグリニッジ宮からキルスティン城の謁見室に呼び出されていた。

「はい、お父様。この地に住まう五つの要素と盟約を交わし、彼らの力を借りることによって可能な、『奇跡』と呼ばれる所業のことでしょ？」

要するに『魔法』とかいうやつ。

こういった話は、改めて自分がどれだけファンタジーな世界に来てしまったのかを痛感させられる。

ルナは非科学的なことは信じたくない人間だった。だが優れた法術使いだという母ウェヌスが水を操るのを見て、ルナは何も言えなくなってしまったのである。

「お前には法術を学んでもらおうと思う。」

「でも…わたしがお母様のように選ばれるかは分からないわ。」

法術は闘いの場でとても有利に働く。
しかし誰も彼もが法術を使えるわけではない。

大地に選ばれた者だけが、古き盟約に従って力を手に入れることができるのだ。

完全に法術を操るには、大変な訓練が必要だ。素質と努力の両方が欠かせない。

法術使いだけが、自分と同じく選ばれた者であるかどうかを判別できるので、素質がありながらも訓練を受けず、一生自分が選ばれた者であると気付かずに終わる民もいた。

娘に危険な訓練を課すことに、ウェヌスは反対するかと思ったが、何か考えるような素振りを見せて、『大きな怪我をしない程度にな

ら』と認めた。
さらには、ウェヌス自身が『ルナには大地の祝福がある』と、ルナの素質を見抜いたのだった。

非科学的なこととはいえ、ルナは法術に興味があった。
使うことが出来るというのならば、是非習得してみたいと思っていたため、皇帝の申し出はありがたかった。
詳しくは追って伝える、とのことだったので、ルナは謁見室をあとにし、母にこの事を報告しようと、後宮へ足を運んだ。

―――柔らかな日射しが降り注ぐ。
後宮でも一番美しいとされるヴィーナスの庭は、皇帝が皇妃に贈った庭だ。
ウェヌスは訪ねてきたルナに、そこでお茶をしようと提案した。６歳までルナもこの後宮に住んでおり、ヴィーナスの庭は彼女のお気に入りの場所でもあった。

「相変わらず美しい庭ですね。」

「あら、あなたのグリニッジ宮のお庭も評判ですよ。でも何故白い花しかないの？ここのように鮮やかな花も良いでしょう？」

ウェヌスの問いに、ルナは困ったように笑った。ウェヌスの言うとおり、グリニッジ宮の庭には白い花しかなかった。白バラ、白百合、白菊……美しい庭だが、季節の花が彩るヴィーナスの庭のように華やさはない。

「わたしはいつか染まってしまうから…わたしらしさを失わないように、という自分への戒めなんです。」

いずれ王位を継げば、多くのものに染まるとルナは思っていた。

欲望、人の悪意、血。

何よりも元の世界へ帰ることを忘れてはならない。居心地の良いこの場所は、時々それを忘れさせる。完全にこの世界の住人にならないというルナの精一杯の運命への抵抗だった。

そんなルナの決意したような顔を見て、ウェヌスはそれ以上何も言わなかった。

「皇帝から聞きました。法術を学ぶんですってね。」

「はい。でもお母様、わたし心配なんです。上手く扱えるかどうか…」

「何を言うのです。あなたは生まれながらにしてその力を持っているはずです。」

ウェヌスの言葉にルナは内心ドキッとした。この皇妃は穏やかで天然のように見えて、多くを知っているのだとルナは感じた。

それもそのはず。

ウェヌスが皇妃の位につくまで、彼女は国一番の法術使いだったのだから。

ルナには『尾形千影』の名前の他にもう一つ秘密があった。

それは誰にもバレてはいけない秘密。

しかしそれさえも母・ウェヌスは知っているように見えた。

「…お母様はなんでも知っているんですね。」

「それでも全てではありません。ルナ、物事とは時が来れば必ずその真実を現すのです。あなたが知るべき時が来れば、あなたは知ることができるでしょう。」

ウェヌスはそう言って微笑むだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1275m/

ルナソルの羽根

2010年10月12日05時06分発行